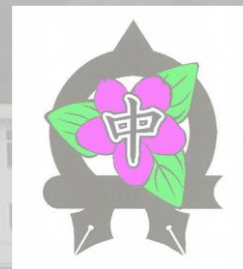


協働



令和5年12月18日発行

奥多摩町立奥多摩中学校

クリスマスプレゼント

校長 原 善 哉

クリスマスプレゼントにまつわる話は尽きません。仮面ライダーベルトを頼んだら届いたベルトはショッカーベルトだったとか。期待したものと全然違うものが届くことはよくあることです。子どもの気持ちと親心には思いの違いがあるのでしょう。しかし親心とは、親になったときに分かるものかもしれません。

私が小学生の時のクリスマスの朝、枕元に届いていたのは、ほしかったプラモデルではなく新しい「ボンナイフ」でした。がっかりです。ボンナイフとはカミソリのような刃の付いたナイフ型の「鉛筆削り」です。

私は小学校入学以来、家のルールによって鉛筆はすべてナイフで削っていました。あまり上手ではなかったので、いつも先のひしゃげた鉛筆を使っていたのです。ある時、友達が、「教室に電動鉛筆削りがあるんだから使えよ。ナイフなんかよりずっときれいに削れるぜ」と言うので、その誘惑に負けて筆箱の中の鉛筆を全部それで削ってしまいました。とても速く、簡単で、そしてすごくきれいに削れるのでびっくりしました。そして何より書きやすい。感じていた罪悪感などは、どこかへ行ってしまいました。うかれて家に帰ったところ当然のごとく親に見つかり、しかられたうえに、すべてナイフで削り直しをさせられました。（もう削ってある鉛筆を、また削り直すなんてもったいないじゃないか！）と心で叫びながら、もんもんと削り直しました。

次の日、またひしゃげた鉛筆を持って学校へ行くと昨日の友達が、「何でせっかくきれいに削ったのにまたナイフで削り直したんだよ？」と聞くので、電動鉛筆削りを使うと怒られるんだと答えました。すると「分かった。ならおまえじゃなくておれが削ればいいだろう。」と言って、また鉛筆をすべてきれいに削り直してしまっただけです。いやな予感がしました。案の定、家に帰るとしかられて、やっぱりナイフで全部削り直しです。

また次の日、友達が興味津々で私の筆箱をのぞきにきました。するとやはりひしゃげた鉛筆が6本きれいに並んでいます。その鉛筆を見た瞬間、友達はムキになってすぐに削り直そうと電動鉛筆削りにまっしぐら。「やめてよ、また怒られるから。」といって鉛筆を取り返したら、友達は気持ちが収まらなかったのか「おめえの母ちゃんバカじゃねーの！」と捨てぜりふをはいてどこかへ行ってしまいました。なんだかやりきれない気持ちをかかえ、ベソをかきながら帰りました。そして親にその一部始終を話すと、意外にも怒るわけでもなく逆に高らかに笑いながらこう言ったのです。「**おまえを最後に笑う男にしてやる。**」当時の私には、その意味がわかる訳もなく、「なに言ってるのか分かんないよ・・・。」と、ただただベソをかきながら鉛筆を削る日々でした。たしか、削るのが嫌でナイフを捨ててしまったこともありました。そのときも、自分の小遣いで買わされたほどの徹底ぶりでした。

私はその後、技術（ものづくり）の教師になりました。のこぎり引きや、かんながけを見せると「先生スゴイ！」と言ってくれる生徒や「技術大好き」と言ってくれる生徒がいました。それが本当にうれしくて「この職に就けて幸せだなあ」とつくづく感じました。この自分を作り上げた基礎は間違いなく、鉛筆削りにあることを、今では心から実感できます。友達にバカといわれようとも、我が子がぐずろうとも、反抗してナイフを捨てようとも。ひるまず毅然として向き合い、最後まで頑張りきった親でした。きっと電動鉛筆削りを1台買った方がよっぽど楽だったに決まっています。

私の子育ての時期には、ポケモンの長蛇の列に並んでおり、親としてここまで頑張りきれたかといえ、正直に言って自信はありません。今だからこそ感じられる「感謝」があります。



当時、親が思った通りに今の私が「最後に笑う男」になったかといえ、まだまだ発展途上です。しかし「ニコリ」くらいはできているかな。あらためて言います「クリスマスプレゼント、本当にありがとう。」